

信する者がいないことも事実であり、会員の「よろこび」や「やりがい」に直接結び付かない社会活動の徹底が、教勢停滞の遠因になってしまふ、という困難性もある。会員からの「専門家の受け売りで言われるより」、「人間とは」「神とは」等々の宗教的な根本的な話をして頂きたい」という不満、「言葉の力を以て人類を光明化しようとする集団の副総裁が、(略)人類の幸福を連想できない出来事ばかりを集めて不安感や恐怖感を煽っている」等といった「違和感」は早急に解消されるべきであろう。宗教活動と社会活動のバランスを再検討し、持続可能な環境活動を推進していくことが同教に課せられた課題と言える。

パネルの主旨とまとめ

寺田喜朗

近年、宗教の社会(貢献)活動へ多くの研究者が関心を寄せている。多くの成果が提出されているが、中でも、稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』は、この領域の研究の意義を広く学界に認知させた意味でエポック・メイキングな成果だったと思われる。同書は、複数の研究者が、さまざまな手法を用いて、諸宗教の「社会貢献活動」を論じた内容だが、総論的な論文やエクステンシヴな手法を用いた論文が複数収録される一方、特定教団の個別の「社会貢献活動」に照準したケース・スタディは少なかった。また、同書は、「社会貢献活動」を様々

なカテゴリーに分類して議論を進めているが、環境倫理ないし環境問題への取り組みについての論及は極めて少なかった。本パネルは、同書が指摘した「具体的な調査研究の蓄積こそ今後の課題」との認識を引き継ぎ、企画されたものである。

周知のように我国では、公害問題、および地球環境問題の深刻化の報道―資源枯渇・環境汚染・砂漠化・温暖化等―を受け、既に様々な宗教者・宗教団体が環境問題への取り組み、ないし環境倫理に対する啓蒙活動を行っている。本パネルは(地球環境に関わる客観的な分析・議論は括弧に置き)、宗教者・宗教団体による環境問題への具体的な取り組み、および提唱されている環境倫理、さらに現代の若者の間の自然観ないし基層的な(アニミスティックな)心性に照準化し、ケーススタディを試みるものである。

本パネルの意義は、以下の二点にあると考えられる。まず、教団という形態を採らないNPO団体(シンブルライフ普及センター)、理論的サンプリングに基づいて選定された新宗教教団(立正佼成会・生長の家)のケーススタディを試みることに、より、この領域の研究史に厚みを加える、という意義である。また、現代の若者達のモノ観、自然観を実証的に検討する作業も、研究史上、重要な意義を有すると考える。いま一つは、学界内外に対する情報発信である。これまで上掲三団体は、いずれも積極的に環境活動を推進してきたにもかかわらず、学界および一般社会における認知度は低かった。これをまずは学界において共有し、今後の宗教の社会(貢献)活動のあり方を検討する有効な素材となすことを我々は企図した。

個別報告の後、コメンテータの小島伸之氏（上越教育大学）より様々な角度からコメントを頂いた。多岐に亘った論点の中で、環境倫理に関する東洋・西洋というコンテクストの差異をどう考えるか、科学技術・文明に対する評価の差異、等という思想的な検討課題と、各宗教運動毎の環境活動の特徴の類型的把握（付加型・転換型）、環境倫理の啓発対象の射程による類型的把握（本部型・会員型・社会型）等という運動論的な検討課題に関するコメントは、本パネルにとって、とりわけ重要な指摘だと思われた。他方、フロアからは、西康友氏（中央学術研究所）、西山茂氏（東洋大学）等から、コメンテータの論点をさらに深化・拡張させる指摘・議論が提出され、個別発表では報告されなかった事情や事態についても議論が展開し、活発な議論が交わされた。

もちろん、各宗教・現代人の環境倫理ないし環境活動を検討する作業は端緒に着いたばかりであり、本パネルも、いくつかの重要な課題を積み残す形で閉じざるを得なかったが、今後の研究課題を明確にした点において非常に有益なセッションであったと思われる。

なお、最後になるが、本パネルのコメンテータを快諾して下さっていた故望月哲也先生のご冥福をお祈りすると共に、急な要請にも関わらず、コメンテータを引き受けて下さった小島氏に改めて感謝申し上げたい。

新しい近代日本仏教研究へ

—— 自他認識・国民国家・社会参加 ——

代表者・司会 オリオン・クラウタウ

コメンテータ 島蘭 進

近代移行期における真宗

—— 護法論を中心に ——

岩 田 真 美

近年、近代日本仏教研究は大きく進展しつつある。しかし、近世から近代への移行期における仏教は「廃仏毀釈」なる用語で概括されているのが現状であり、「近世排仏論」廃仏毀釈の惹起↓墮落した僧侶の覚醒」という近世仏教墮落論的な図式は未だ主流である。本報告では、墮落した僧侶の覚醒の過程として描かれてきた護法論を再考するが、幕末維新期の仏教界において、最も意欲的に護法運動を展開したのは真宗であったといわれていることから、真宗の護法思想を中心に検討したい。そして、近世から近代への仏教思想の展開ならびに「近代仏教」の始原を考えることを目的とする。

柏原祐泉は、「護法論」とは「排仏論」への対応として表れたものと指摘する。いわゆる「排仏論」とは仏教批判の言説群の総称であるが、「護法論」とは仏教批判に対して、仏教側が自己の正当性を主張したものといわれてきた。しかし、一旦、そのような捉え方を離れ、真宗における「護法」とは何であっ